

重点目標を達成するための今年度の取り組みと評価基準・評価結果

A 重点	C短期経営目標(年度末までにどのような状態にするか)	具体的な方策	具体的な取り組み		成果		自己評価				学校関係者による評価			
			評語	取組に関する指標(可能な限り数値で)	評語	成果指標(可能な限り数値で)	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策	評語	主な意見
							中間	年間	中間	年間				
1 学力の向上	児童一人一人が学ぶ楽しさを実感できる授業実践を、全ての教員が最低でも学期1回行う。	全ての授業において、自分の考えを伝え合う場の設定し、活動を通じて、自分に自信をもち、伝え合う楽しさを実感できるようにする。	A	教職員の取り組み状況80%以上	A	児童アンケートでA, B評価80%以上	A	A	A	A	11月の教育会研究授業(家庭科・学級活動)において児童が意見を出し合い伝え合う姿が見て取れた。学校の取り組みの成果の一端が見られたと考える。	来年度も引き続き道徳授業の研究を通して自分の意見を持ち、伝え合う楽しさを味わえる授業作りへの取り組みを行って行く。	A	・学校が取り組んでいることで、効果が出ていると見て取れる。引き続き、継続的に取り組んで頂きたい。
			B	教職員の取り組み状況70%以上	B	児童アンケートでA, B評価70%以上								
			C	教職員の取り組み状況60%以上	C	児童アンケートでA, B評価60%以上								
			D	教職員の取り組み状況60%未満	D	児童アンケートでA, B評価60%未満								
	管理職、主幹教諭が授業力向上のための研修に積極的にに関わり、教員一人一人が授業力の向上を実感することができる。	授業力アップ期間の授業参観では、成果と課題をもつ。年間を通したOJTの研修等に積極的に参加する。	A	教職員の自己評価で達成度80%以上	A	保護者アンケートでA, Bが80%以上	A	A	A	A	個々の教員の授業観察から、1回目の反省をもとに2回目・3回目に改善がみられる場面があった。授業力向上への取り組みの成果と考える。	なかなか授業を改善できない教員がいることも事実である。授業改善に向けての自己チェックができる表などの工夫が必要。	A	
			B	教職員の自己評価で達成度70%以上	B	保護者アンケートでA, Bが70%以上								
			C	教職員の自己評価で達成度60%以上	C	保護者アンケートでA, Bが60%以上								
			D	教職員の自己評価で達成度60%未満	D	保護者アンケートでA, Bが60%未満								
	校内研究(道徳)、小中一貫教育研究、年次研修等を等して全ての教員が授業を公開し、研究協議を行う。	全学年で道徳の研究授業、11月の小中一貫実践での研究授業等を行い、協議会では、全員意見をもつてのぞむ。	A	教職員の自己評価で達成度80%以上	A	授業についての保護者アンケートでA, Bが80%以上	A	A	A	A	道徳研究授業6実践、小中一貫教育研究授業8実践、区教育会研究授業2実践、都研究会授業1実践を行い全てにおいて協議会を持つことができた。	研究協議会の工夫は校内研究会にて年間を通して実践できた。短い時間のなかで、テーマを絞った協議ができるかが今後の課題である。	A	
			B	教職員の自己評価で達成度70%以上	B	授業についての保護者アンケートでA, Bが70%以上								
			C	教職員の自己評価で達成度60%以上	C	授業についての保護者アンケートでA, Bが60%以上								
			D	教職員の自己評価で達成度60%未満	D	授業についての保護者アンケートでA, Bが60%未満								
2 規範意識の向上	道徳授業地区公開講座、学校公開での授業公開を含め、年間最低でも2回の道徳授業公開を全学級で行うことで教師、児童、保護者の道徳教育への意識を高めていく。	7月の道徳授業地区公開講座の他に、土曜学校公開において道徳授業の公開を行い、地域・保護者による評価を行う。	A	教職員の実施状況で80%以上	A	道徳教育についての保護者アンケートでA, Bが80%以上	C	B	A	B	道徳の授業の公開は各学年、クラスに於いて年度末に向けて計画的に行うことができた。	校内研究の研究のまとめを行い、集録として記録に残していく。残った課題を明確にし、来年度解決に向けて取り組んでいく。	A	・学校側として、特に忘れ物などの課題について、まだ、改善の余地があるということだが、学校としてきちんと課題認識をし、要改善項目を把握していることに安心している。今後の改善に向けての取り組みに期待している。
			B	教職員の実施状況で70%以上	B	道徳教育についての保護者アンケートでA, Bが70%以上								
			C	教職員の実施状況で60%以上	C	道徳教育についての保護者アンケートでA, Bが60%以上								
			D	教職員の実施状況で60%未満	D	道徳教育についての保護者アンケートでA, Bが60%未満								
	常に「みなみの子のやくそく」の徹底を図る。児童の忘れ物、全校で10%以下にする。	月に1回以上「みなみの子のやくそく」を振り返る。守っていないことについては見逃さず、適宜、指導を行う。定期的に、学年会で話し合い、忘れ物をしないようにする取り組みを行う。	A	教職員の自己評価で達成度80%以上	A	あゆみの忘れ物の項目、Cが10%未満	A	B	B	C	あゆみの忘れ物についての項目で「もうすこし」の割合は18%であった。前回よりも5ポイント下がってしまったている。改善への取り組みの恒常性が問われる。	全校を挙げて「無いから仕方ない」という考え方を根絶していく。全校的な取り組みを強化する。	A	
			B	教職員の自己評価で達成度70%以上	B	あゆみの忘れ物の項目、Cが10%以上15%未満								
			C	教職員の自己評価で達成度60%以上	C	あゆみの忘れ物の項目、Cが15%以上20%未満								
			D	教職員の自己評価で達成度60%未満	D	あゆみの忘れ物の項目、Cが20%以上								
	児童一人一人のスマールステップの自己目標を設定し、目標を達成することによる達成感を積み重ねることができる。	定期的に振り返りを行い、自己評価をさせ、達成できたら、新しい目標を設定する。	A	教職員の自己評価で達成度80%以上	A	児童アンケートで、A, Bが80%以上、Aが50%以上	A	B	C	B	日々の振り返りは各学級に於いて工夫して行われている。しかし授業の中での一つ一つの児童の発言やつぶやきへの価値付けをさらに増やすテイク必要がある。	教員一人一人が自己の授業に於いて具体的に振り返られるような指標作りをしていく。	A	
			B	教職員の自己評価で達成度70%以上	B	児童アンケートで、A, Bが80%以上								
			C	教職員の自己評価で達成度60%以上	C	児童アンケートで、A, Bが60%以上								
			D	教職員の自己評価で達成度60%未満	D	児童アンケートで、A, Bが60%未満								
3 人との関わり合いの充実	全ての学級で美しい教室環境の中で、集団に認められ、児童一人一人の居場所が確保され、活躍できる。	朝、整った教室でスタートできている。一人一人の強みを生かせるように、授業や生活の場面で活躍の場をつくる努力をしている。	A	教職員の自己評価で達成度80%以上	A	児童アンケートでA, B評価80%以上	A	A	A	A	中間における反省点(教室にいられない児童)は未だに解決できずにいる。あらゆる職種、関係機関を活用して改善していく使命がある。	学校体制で解決に向けて取り組んでいるが今後は児童の心の問題として根本的な課題解決に向けての取り組みが必要。	A	・学校内の環境について改善が進んでいるということで、理解した。引き続き、改善に向けた取り組みに期待する。
			B	教職員の自己評価で達成度70%以上	B	児童アンケートでA, B評価70%以上								
			C	教職員の自己評価で達成度60%以上	C	児童アンケートでA, B評価60%以上								
			D	教職員の自己評価で達成度60%未満	D	児童アンケートでA, B評価60%未満								
	教師がリードしながら、活発な話し合い活動を行うことで、集団解決の仕方を児童が理解し、実践しようとする姿が見られる。	日々の授業において、集団解決の流れを意図的に取り入れ、児童の授業への達成感・充実感を高める。	A	教職員の取り組み状況80%以上	A	児童についての保護者アンケートでA, Bが80%以上	A	A	A	A	ホワイトボードを使ったペアトークについては各学級に於いて成果が見られている。その成果を有機的な集団解決に生かしていけるかが課題である。	取り組みの成果の上に児童一人一人が自信をもって友達と意見を交わし、解決していく実感を持たせていきたい。	A	
			B	教職員の取り組み状況70%以上	B	児童についての保護者アンケートでA, Bが70%以上								
			C	教職員の取り組み状況60%以上	C	児童についての保護者アンケートでA, Bが60%以上								
			D	教職員の取り組み状況60%未満	D	児童についての保護者アンケートでA, Bが60%未満								
	全ての学校行事、学年行事、学年活動等を児童を高める機会とし、児童一人一人の活躍の場を設定し、児童相互の認め合いができる環境を整える。	全ての行事において、児童の取り組み目標を明確にし、取り組んでいく。また、行事を通じて、主体的に取り組む手だてを工夫する。	A	教職員の取り組み状況80%以上	A	学校行事についての保護者アンケートでA, Bが80%以上	A	A	A	A	学芸会において、各学年ともに限られた時間の中で個々の目標をしっかりと持った取り組みが見られた。	主体的できちんと自己評価ができる取り組みができてきているため、教員、児童ともに評価していく。	A	
			B	教職員の取り組み状況70%以上	B	学校行事についての保護者アンケートでA, Bが70%以上								
			C	教職員の取り組み状況60%以上	C	学校行事についての保護者アンケートでA, Bが60%以上								
			D	教職員の取り組み状況60%未満	D	学校行事についての保護者アンケートでA, Bが60%未満								

* 学校関係者による評価の評語は、自己評価結果について以下の観点で行う。

A 自己評価は適切である B 自己評価は概ね妥当であるが根拠資料が不足している C 自己評価と実態との差が大きい D 自己評価方法を見直す必要がある